

令和4年度 鳥取県私立幼稚園・認定こども園教育保育研修大会 記録

《第1分科会》

(テーマ) 「0歳から15歳までの育ちを見つめる」

～乳幼児期から始まる生きる力の根っこ育てを出発点として～

(発表園) 認定こども園 倉吉幼稚園

発表者 林 友里・船木 梓 (倉吉幼稚園)

指導助言者 山名 毅 (成徳小学校校長)

司会者 矢吹 真輝 (倉吉幼稚園)

記録者 新藤 秀利・伊藤 麻侑子 (倉吉幼稚園)

～研修レポートのまとめ～

【本研修会を受講して学んだことについて】

- ・0才から15才までの育ちをみつめる、ということの大切さや、素晴らしさを学び、子どもの育ちを見届けたい、との思いでプロジェクトチームをつくり、現実に叶えられるということを学びました。何事も「したいけど、なかなか難しい…」で留まっているのではなく、手探りの中でも一歩踏み出すことの大切さ、積極的にオンラインを使っただけのそれぞれの現状、取り組み、交流など色々なども参考になりました。
- ・「交流はあるが、連携がない」という言葉が印象的だった。交流の積み重ねが連携につながるのではないかと思っていたが、各々の職員が同じ方向性を持ち、同じ意識を持つということが大切であるということ学んだ。
- ・幼稚園、保育園、小学校、だけではなく中学校までの教職員が連携を取り、様々な活動をされている中でオンライン交流会での中学校の生徒の感想で『自分もこんなに小さい頃があった』『10年経って育ったと感じた。親に感謝』などの自己肯定感につながる感想や、過去の自分を振り返ることで未来の自分のイメージにつながるということが、いま問題になっているいじめや不登校、段差の未解消などの解決へ近づけるということ学ぶことができました。
- ・指導助言のお話は納得できるものがあつた。だるまおとしの中に柱となる小槌を通し、一貫性のある育ちを保障できるよう、幼小中が連携を深めていけたらと感じた。
- ・乳幼児期に身につける力を知、徳、体に分け、そのうちの丈夫な力をつくるために、土踏まずと下あごの形成が深く関係していると学んだ。

- ・幼稚園だけで連携を考えていくのではなく、幼稚園は根っこ育ての出発点として考え、小学校、中学校、その先とつながっていく保育・教育を行っていくべきなのだ と学んだ。生きる力の基礎づくりとしてその先の姿を想像しながら、ねらいをもって活動を考え、振り返りながら新たな課題や活動を考えていく事が大切だと学んだ。
- ・倉吉幼稚園が保育のテーマにしておられる「乳幼児期の生きる力の根っこ育て」を丁寧に説明していただき、自立を中心として広がりをもせる様々な項目が一つひとつ大変意味のあるものだと感じた。5領域を軸に「水、音、風、緑、土、紙」その交わる場所に「知的興奮、驚き、感動、喜び、好奇心、不思議」と、保育教諭が焦点を当てやすいような工夫があるところなど参考にしていきたい。
- ・倉吉幼稚園の取組みは、コロナ禍ならではの取組みで先生方の様々な工夫に感心させられました。オンライン交流会・オンデマンド公開保育、画面からでも気持ちが繋がっている様子が手に取るようにわかりました。交流会は、自身との向き合い方や、憧れを持つための目指す姿。すべての年齢の子どもたちに、それぞれに利点がありましたね。

【本研修を受講して、今後の保育実践に活かしたいことについて】

- ・保幼小中の連携の課題である『交流はあるが、連携を感じられない』という点は、他園でも課題であるので、各園での実践や課題も考慮しながら、この言葉を意識して取り組むことができればよいと思う。
- ・今幼稚園で過ごして子供たちのなかに育ったものがどう学びにつながっているのか、知ることができると今後の保育にいかしていけるのではと思った。まずは地域の小学校とそういう場を持ち、もう少し気軽にかかわっていけるようにならないといけないなと思った。一緒に子供たちの育ちをみとっていき地域的教育集団になっていきたいと、そのための努力をしていかねばならないと思った。
- ・普段、幼稚園の中での子どもの育ちの姿しか目にしないが、0歳から15歳までの育ちの姿を知り、日々の取組みや保育に活かすことができると感じた。幼稚園の中でも、日頃から他の学年の保育の様子や子どもの姿を共有して、育ちの姿を見つめていきたい。
- ・山名校長先生が言われた、子どもとの関りの中で不可欠な事として「職員の顔が見える、→「顔が見えたら、動きが見える、→「動きが見えたら、やるべきことが見える、→「やるべきことが見えたら、有効な共通項を探ることが見える、ということ」を今後、参考にしていきたいと思います。
- ・土踏まずの形成のためにも、裸足で過ごせる環境を整え、靴選びを保護者に啓発していきたいと思いました。立つ、歩くと、いう当たり前の動作ですら、体幹がしっかり保てない子がいる現状の中で、保護者にも理解を深めてもらうことの大切さや園での課題をどんなふうに取り組んでいくのかを話し合っていきたいと思いました。

- ・連携を行っていく為には、互いの顔や動きが見える環境を作る事が必要だと学びました。この学びを生かして、職員間での連携の中でもメモや紙だけでの会話ではなく、少しでも直接話すことが出来る時間を作っていきたいと感じました。また、思いやりを大切にしながら子どもや保護者の方と関わっていきたいです。
- ・中学生にとっても幼稚園のころを振り返るのは自己肯定感を高めるきっかけになることが分かった。このごろはできていないが職場体験もお互いにとって貴重な機会として見ていこうと思う

【ご意見・ご質問及び回答】

- Q1. 0歳から15歳の15年間の育ちを見守っていくなかで幼保小中が連携しているということで、1年後2年後の連携の様子も知りたいと感じました。
- A1. スタートしたばかりのプロジェクトですが、継続は力也と考え、今後も成果を発信していく機会を設けなければと考えています。
- Q2. 山名毅校長先生の「だるま落としの小槌にならなくてはいけない」「1つの人格は、この小槌が中に芯として通っているように一つに繋がっているべき」という言葉がまずは自園という規模の中でさえ職員間の交流、連携が難しく、同じ園であるのに各々のパッチワークになっていることを考えてしまいました。(倉吉幼稚園さんでは0歳～5歳までの保育の繋がり、職員間での共通理解、連携を図るためにどのようなことをされていますか?)
- A2. 本園でも多聞にもれず、認定こども園に移行してから、職員が集まり、様々な協議をしていくことが以前より難しくなっています。その為本園では、倉吉幼稚園の教育保育の指針となる教育構想図や「ようちえんがだいすき」という本園の特色を示した冊子を3年に1度改訂し保育の寄処となるツールを作成しています。又、保育部・幼稚部に部長をおき、情報が末端まで正確に伝える工夫も取り入れています。
- Q3. 今回は靴選びからの保幼小中の連携の研究内容を知ることができたが、サブタイトルになっている「乳幼児期から始まる生きる力の根っこ育て・・・」というところから、靴選び以外にどのような生きる力の根っこ育てを意識した活動を行っているのか、というところが気になった。土踏まずの形成を意識したことで、子どもにどんな影響があったのか。また、この活動をする前と後でどんな変化が見られたのか、というところも知りたいと思った。

A3. 「土踏まずと下あごの形成」を指してというテーマで平成 20 年から毎年 6 月に自主公開研究発表会を催してきました。土踏まず形成に係る取り組みは、年 3 回の足型測定や、万歩計の携行、体力測定、毎朝の足あそびタイムなど検証軸になる取り組みと、形成促進を狙ったあそびの創造等楽しく保育者の創意工夫によって展開されていく日常を生活の中に織り込んでいます。研究のはじまりと共に感心させられたのは園からの発信による保護者の意識の変容で、靴箱に並ぶ子どもたちの靴が一気に理想的な靴に変わっていたことを思い出します。

Q4. 「乳幼児期の生きる力の根っこ育て」という題から、幼児期の生きる力の土台作りの発表かなと思っていたが、実際は幼保小中連携の取り組みの発表だった。交流はあるが、連携は感じられないというのはよく聞く話であるが、連携を持つためにいろいろな取り組みをされ探っている状態だということを感じた。連携を深めたことで子どもがどう変わったか、教職員がどう変わったのかをまたお聞かせいただけたらと思った。

A4. まだまだスタートしたばかりのプロジェクトで成果といえるものは少ないですが、子ども同士の交流に中学生を巻き込んだことで中学生の気持ちにも、やさしさやいたわり、感謝などの感情が芽生えたことは大きな収穫のひとつだと考えています。

Q5. 今後、プロジェクトチームがどのようなことに視点をあて、学びを深めていき、それらが幼稚園→小学校→中学校と学びがシフトしていくのか…今後の研究が楽しみである。

A5. 現時点では各施設の教職員間で共有できている子どもたちを見つめる視点は「足」だけですが、今後、幼児期の終わりに育ててほしい 10 の姿や学びに向かう力等の視点を共有しながら様々な視点から 0~15 の育ちを見つめられる組織になっていくことを目指しています。